

に、如奕碁之先手也と見ゆ、

〔因云碁話〕六聖目の事

近來上州邊の老人の話に、局面の中央へ先を置事を太閤先といふよし、其の義は豊臣太閤秀吉公、圍碁を好みたまひけるが、中央へ先手を置きて、敵手の眞似をすれば負ることなし、持碁か一目勝になる理なりとのたまへりといふ、圍碁口傳に、教深が説に曰、まねび碁といふ事あり、普通の人は不知云々、眞似碁の事をいふか、若くは太閤先の事ならば、極て僻説なり、十八手にて眞似不成打方あり、

〔因云碁話〕十和漢同趣

筭哲天文の理を考へ、寛文年中營中釣覽の圍碁に、本因坊道策と先著を、勢子の中央へ置く、然れども、筭哲九目碁を負たり、清朝の國手汪漢年なる者、大極へ先を置きし事あり、國は和漢を分ち、人は先後を隔といへども、相似たる事なり、

〔書言字考節用集〕八互先カカヒセン圍碁

〔續世繼〕七

つちみかどの齋院と申て、種子内親王と申ておはしき、略中歌なども、人々まゐ

りてよむをりも侍けり、水のうへの花といふ題を、ときうたよみどもまゐりてよみけるに、女房の歌とりぐにおかしかりければ、むくのかみとしよりも、むしろにつらなりて、このうたは、圍碁ならばかたみせむにこそよく侍らんなど、とうぐにほめられけるとぞ、

〔慶長見聞集〕六仙榮碁すきの事

むかし略中 小田原に、武與左衛門順衛木齋藤など、いひて、碁よく打者共あり、ばか山田にたがひせんの碁、いづれも眞野には三つ四つの碁なり、

〔嬉遊笑覽〕四

今石九ツおくを、せいもくといへど、此九ツ置べき處の黒星は、一ツにても聖目な